

た普墮戦争にイタリアが20日を以て参戦し、7月3日にプロシアが勝利したことを知りました。これによってイタリアも戦勝国となり、彼はこの勝利が日本での交渉の追い風になることを確信したものとされます。

7月25日、マジエンタ号はカシヨンの斡旋によって幕府の菊池伊予守隆吉の訪問を受け、幕府との準備交渉が始まります。この時、カシヨンからフランス語を習った塩田三郎が通訳を務め、その後次第に幕府側の交渉体制が固まります。アルミニオンがパリで会談していた柴田日向守剛中が、長崎奉行や外国奉行を務める朝比奈昌広とともに御用取扱を経て全権を持った代表になります。アルミニオンやカシヨンが期待をしていた日本側の陣容ではありましたが、カシヨンがもたらした幕府の当初の意向は、

「御老中としては目下、大坂に滞在中の大君からの指令があるまでは、われわれの要望に関して何らの決定もなしえないが、日本国は新たな条約を結ぶことはほとんど望んでおらず、かつ、有力な一派が外国人の入国容認に反対しており、イタリアの要望についても、プロシアの対日条約の範囲内にとどめることに甘んじない限り、確実に拒否されるだろう」<sup>(3)</sup>

とするもので、前述のロッシュが懸念した交渉時期の問題が現れた形でした。また、プロシアの対日条約の範囲とは箱館、横浜、長崎での貿易で、フランスやイギリスなどと交わした安政五カ国条約に含まれる江戸、大坂、新潟、兵庫の所謂、開市開港での貿易は対象外となります。しかし、この開港場の問題についてアルミニオンは、確信を持った態度を貫き、将来の最恵国条項の適用によってフランスなどと同様の待遇を受けることができるとして問題視せず、現実的なプロシア並の条約の締結を目指します。

### ■「蚕」を二人の共通点として

このようなアルミニオンの柔軟な姿勢は、日本側を軟化させたのみならずフランスなど各国の在日外交団からも好感を呼び、カシヨンも終始アルミニオンを助けました。その結果、8月25日にはプロシアが結んだ条約と同等の内容で

締結を終えました。これによって、イタリアは養蚕関係の物資を直接輸入することができるようになったのです。アルミニオンはロッシュ・フランス公使やカシヨンにお礼を述べた後、9月1日に次の交渉国である中国の上海に向けて出航したのです。

一方、フランス使節の通訳を終えたメルメ・カシヨンは、アルミニオンへの協力を終えると10月17日に帰国の途につき、1867（慶応三）年にパリ万国博覧会に派遣された徳川昭武とナポレオン3世との会見の席で通訳としての重責を果たすことになります。

カシヨンが日本を離れた1866（慶応二）年にフランスにおいて、彼の翻訳書が刊行されました。この書物は“De l'education des vers à soie au Japon”（『日本養蚕論』）です。原典は上垣守國の『養蚕秘録』<sup>(4)</sup>で、カシヨンがフランス語に訳し、それがイタリア語に訳され、さらにイタリア語から再度フランス語に翻訳されたという経緯があります。フランス国立図書館に論文形式の印刷物として所蔵されていますが、古書市場でも見つけられない「幻の書物」です。

カシヨンは間接的にイタリアの養蚕業を助けましたが、本国のリヨンなどでも苦境にあった絹糸産業を立ち直らせようとしていたのではないのでしょうか。日本で目的を共にしたアルミニオンの熱意に心を打たれていたのかもしれませんが。

#### ----- 主な参考文献と脚注

- (1) “Il Giappone e il viaggio della corvetta Magenta nel 1866”本書の出版事項はジェノヴァで1869年である。なお、日本語対訳本は大久保昭男訳『イタリア使節の幕末見聞録』（新人物往来社、1987年。）である。
- (2) 富田仁著『メルメ・カシヨン―幕末 フランス怪僧伝』145頁。有隣堂、1980年。
- (3) 前掲『イタリア使節の幕末見聞録』68頁。
- (4) 但馬の国養父生まれの上垣が仙台で養蚕業を学び、1803（享和三）年にその技術を本書に著した。他にもこれより前の1848年にフランツ・フォン・シーボルトが持ち出したとされる『養蚕秘録』をオランダ皇室翻訳官のJ. ホフマンがフランス語に翻訳し、パリヤトリノで刊行されていた。

おく まさよし（司書・副館長兼事務長）